別記様式第6

論 文 審 査 の 要 旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士（　文学　） Ph.D.	氏 名 (Candidate Name)	上杉　崇
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論　文　題　目 (Title of Dissertation)

5・6世紀ガリアにおける司教権力の成立と展開

論文審査担当者 (The Dissertation Committee)

主　　査 (Name of the Committee Chair)	准教授・足立　孝
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授・井内　太郎
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授・前野　弘志
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授・本多　博之

〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)

西ローマ帝国の瓦解とゲルマン諸部族国家の成立をみた5・6世紀という時間的枠組みは，古代か中世か，いずれかの時代区分にやや乱暴に組み込まれてほぼ等閑視されてきた。ローマ系のセナトール貴族門閥によって独占されたガリア司教はまさに，この問題の核心をなしている。本論文は，教会会議録，書簡，年代記，聖人伝の網羅的かつ綿密な分析をつうじて，同時期のガリア司教そのものを歴史上にあらためて位置づけようとする試みである。

本論文は全体として，序論，それぞれ2～4節からなる第1～3章，結論，参考文献，図で構成される。

序論では，5・6世紀ガリア司教をめぐる研究史の整理から，前述の問題設定が抽出される。

第1章では，一連の教会会議決議における司教選出規定の政治的な戦略性が明らかにされる。5世紀ガリア司教は自らの選出にあたって，ガリア南東部のレランス修道院出身者，または同中部オーヴェルニュの貴族門閥にねざした同僚関係を重視すると同時に，都市民による承認を併せて重視した。だが，6世紀にはフランク王権との連携を志向する代わりに，王権による司教選出への介入をよぎなくされる。だからこそ，都市民による候補者の選出というもはや実効性のないローマ的伝統にうったえて，都市の代表者であることを従来以上に強調したのである。

第2章では，前述の二つの司教ネットワークの実態がそれぞれ具体的に検討される。すなわち，一つは，レランス修道院での修練を経てガリア南部の司教座に進出した司教のネットワークであり，5世紀中葉に最盛期を迎えるも，派閥闘争やローマ教皇の介入によって6世紀前半には事実上の解体をみた。いま一つが，オーヴェルニュの貴族門閥成員が自ら司教座に進出し，司教相互のネットワークに転化したものがそれである。こちらは，クレルモンを中心に，西ゴート支配，ついでフランク諸王の勢力争いに直面しながらも，成員間の連携を強固に維持したのである。

レランス・ネットワークの動揺は，ガリア教会の首位権をめぐり，北部の司教座の台頭を許した。第3章では，その最たる例であるトゥール司教座が具体的にとりあげられる。4世紀後半の司教マルティヌスは住民の改宗や農村教会の設置をつうじて司教区形成の素地を同市にもたらしたが，マルティヌス崇敬そのものは本来同市とは結びついておらず，それをトゥールの聖人に転化させたのは5世紀後半の歴代トゥール司教であった。彼らはそれを利用してフランク王権に接近するばかりか，6世紀後半には，マルティヌスをトゥールならぬフランク＝ガリアの聖人として提示することで，自らの立場を強化することに努めたのである。

結論では，全体が要約されたうえで，次のように結ばれる。すなわち，5・6世紀ガリア司教は，よって立つべき政治権力の中心が定まらないなかで，都市の代表者，聖界の指導者，聖人崇敬の統率

者といったさまざまな要素を組み合わせ，特有の司教像を構築することで自らの権力基盤を築こうとした。確かにその輩出母体はセナトール貴族門閥であったが，彼らはたんなるローマ的遺産の継承者ではなかった。それゆえ，ガリアの大半を支配したフランク王権が継受したローマ的諸制度とは，もはや純粋な帝国の遺産ではなく，ガリア司教が自らの権力基盤を構築すべく再編したものであったのである。

以上のように，本論文は，精緻な史料分析に支えられながら，断絶か連続かという古代から中世への移行をめぐる二項的な対立そのものに全面的な見直しを迫る，重厚かつ刺激的な論考である。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500字以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed 500 words.)